

サッカーのプレー中における非利き脚の使用頻度と傾向 -2018W 杯上位国と 2019U-17W 杯上位国の比較-

コーチング科学研究領域

5020A001-0 青山 悠吾

研究指導教員：堀野 博幸 教授

I. 序論

サッカーのプレー中に、ボールを止める、蹴る、運ぶといったボールコントロールを行う際には、主に下肢や頭部、胸部等を使用する。井上・佐藤(2000)は、「ボールを飛ばす、止める、あるいは運ぶにせよ、胸部や頭部を使用できるとはいえ最も使用されるのは下肢であるが、人間には左右差があるため、左右両方の脚を自由自在に扱うことのできる選手は少ない」と述べている。藤田・川北(1968)は、サッカー選手における利き脚の研究の結果、利き脚には強さではなく、巧緻性を求め、ボールコントロールのしやすい方を、利き脚とした。本研究では、より多くボールタッチをした方の脚を、その選手の利き脚とした。

サッカーにおける利き脚と非利き脚に関して、先行研究がされてきた中で、井上ほか(2000)は非利き脚の習得について、「必要なのは試合で活かせる技術の習得である」と述べている。しかし、実際に試合で活かせる技術がどのようなものであるかについては、未だに明らかにされていない。また、Grouios et al.(2002)の研究では、「サッカー選手の脚の使用について、両脚でボールを扱うことが高いレベルでのプレーを可能にしているのか(人工的)、それとも高いレベルでプレーしている中で彼らは両脚でボールを扱うことが出来るようになったのか(自然的)」を明らかにすることが、サッカー選手における両脚の使用に関しての成長過程を明らかにするための研究課題として挙げられている。

そこで、本研究では、ゲームパフォーマンス分析を用いて、サッカーの試合中における非利き脚の使用頻度と使用傾向を調査する。本研究の目的は、サッカーのプレー中において、プレー種類、

プレーする位置、DF の存在によって非利き脚の使用頻度や傾向に違いはあるのか、利き脚と非利き脚の精度に違いはあるのか、そして非利き脚の使用に関する年代による違いを解明することである。

II. 研究方法

研究対象は 2018W 杯、2019U-17W 杯それぞれにおける決勝、3 位決定戦、準決勝 2 試合の計 8 試合となった。記述分析法を用いて、芝の目やフィールド上の線を手掛かりに、目視でピッチの縮図にボールや人の位置をプロットした。

また、以下に示す分類項目ごとに、プレーを分類し、それぞれで使用した利き脚と非利き脚の割合や数値を比較した。また、A 代表と U-17 代表の年代による比較も行った。

1. プレー種類：ファーストタッチ、ドリブル、パス、シュート、セットプレー、ディフェンス。
2. プレー位置：縦 3 分割、横 5 分割、縦横 15 分割。
3. プレー結果：成功、失敗。
4. 半径 3m 以内に存在する DF の人数：0 人、1 人、2 人、3 人、4 人。
5. 半径 5m 以内に存在する DF の人数：上に同じ。
6. 1st DF の距離。
7. ボールタッチ回数：1 タッチ目、2 タッチ目以降。
8. ファーストタッチの際のパスに対する身体の向き：遠い方の脚、近い方の脚、正面からのパス、後方からのパス。

9. パスの特性：I-Mov, D-Def, パスの距離,
パスの角度, パスの速度.

III. 結果及び考察

1. サッカーの試合中に必要な利き脚と非利き脚の技術

2018W 杯上位 4 チームにおける非利き脚の使用頻度と傾向を調査した結果, Carey et al.(2001)の先行研究と同様に, 非利き脚は利き脚に比べ, 使用頻度は低いが, 精度は同等であることが明らかになった. その中でも非利き脚が必要とされるのは, シュート, ディフェンス, DF のプレッシャーを受けている際のプレーである. 一方で, ドリブルに関してはより多く利き脚を使用しており, 非利き脚の成功率も利き脚に比べ低いため, 非利き脚のドリブルの必要性は低いといえる. パスに関してもより多くの利き脚を使用しているが, 利き脚と非利き脚の成功率や, パスの有効性を測る数値に有意に差が無く, DF のプレッシャーを受けている際の使用頻度が高いことから, 非利き脚のパスの精度は高める必要があるといえる. また, 先行研究と同様に, 右利き選手のパスに関しては右サイドでは右脚, 左サイドでは左脚の使用が多かったことから, 特に右利き選手は, 自身のプレーする位置を広げるためにも, 非利き脚の習得が重要である. しかし, DF のプレッシャーを受けていない際や, AT での利き脚の使用頻度が高かったことから, まずは利き脚を優先的に使用することが重要であると考えられる. 一方で, 利き脚を使用させない守備も重要であるといえる.

2. A 代表と U-17 代表における違い

利き脚と非利き脚の使用頻度は A 代表と U-17 代表で同等であった. しかし, A 代表と U-17 代表の違いとして, 後述する 2 つの点が挙げられる.

1) 非利き脚の技術レベルの差

U-17 代表は簡単なプレーでの非利き脚の使用が多く, 非利き脚の精度が高いとはいえないことから, 難易度の高いプレーではあまり非利き脚の使用をしないという傾向にあると考えられる.

また, A 代表は U-17 代表に比べ, 味方の利き脚により多くのパスを出していた. よりプレーのしやすい利き脚で味方競技者にプレーさせるといっても, A 代表と U-17 代表の競技レベルの差であることが示唆された.

2) DF のレベルの差

U-17 代表の利き脚と非利き脚の技術のレベルには差があった. それにも関わらず, A 代表が DF のプレッシャーを受けている際により多くの非利き脚の使用をしているのに対し, U-17 代表はそのような状況でより多くの利き脚を使用している. これは A 代表における DF が, 攻撃側選手が使用する脚の制限を出来ている一方で, U-17 代表における DF はそのような守備を出来ていないということが要因として考えられる.

IV. 結論

本研究の目的は, サッカーの試合中のどのような場面において非利き脚が使用されているのかを明らかにすること, 加えて A 代表と U-17 代表における利き脚と非利き脚の使用頻度や傾向の違いを明らかにすることであった. その結果, プレー種類やプレーする位置, DF との関係によって非利き脚の使用頻度や傾向に違いがみられた. また, 年代によっても違いがみられた. U-17 代表は A 代表に比べ, 非利き脚の技術レベルと DF のレベルにおいて劣っていることが明らかになったが, 今後の環境の変化によって成長の余地があることも示唆された.

本研究の今後の課題としては, さらにプレーの条件をより細かくし調査を行うことや, 選手や指導者へのインタビュー等による質的調査を行い, より詳細に非利き脚の使用が必要とされるプレーを明らかにすることが挙げられる. また, プレーする位置と使用する脚の関係に関しては, その試合に出場する選手や, その選手の利き脚, 相手の守備に影響を受ける可能性がある. そのため, 複数大会に渡って調査する必要性もある. そして, サッカーの試合で必要な技術をどのように習得するか, トレーニング方法等の検討も今後の課題として挙げられる.